

2021年度  
修士学位請求論文要旨

言文一致文体形成における明治期演説の文体の役割

— 文末断定表現に着目して —

国際日本学研究科 国際日本学専攻 日本語学・日本語教育学研究領域  
学生番号：4911194001

神田脩一郎

## 要旨

Iの「1 研究背景」では、これまでになされてきた先行研究から、言文一致文体形成に明治期演説資料が役割を果たしたことを確認する。「2 明治期演説資料の資料性」では、近代言文一致文体の成立に関わったと考えられる「演説資料」の資料性について、文芸系の資料の資料性とも比較しながら論じている。特に、文芸系の資料、演説資料の両方において、強い書き言葉性を有する話し言葉を基盤として成立したことを指摘している。「3 先行研究」では、これまで行われてきた近代の演説について先行研究を、リストアップし、それぞれを「概論的研究」・「実証的研究」・「国会議事録を基本資料とするもの」の3つに分類する。そして、本研究に直接関わる先行研究として代表的なものを「3 (1) 概論的研究」・「3 (2) 実証的研究」において紹介し、問題点を検討する。「4 文末断定表現と文体の研究」では、文体の成立を考える上で、なぜ文末断定表現に注目するのかを、言文一致文体の創設者とされる二葉亭の回想から根拠立てて説明する。「5 テキストジャンルと文体についての研究」では、野村(2013)と宮島(2004)の先行研究を引き、この2つを総合して考え、テキストジャンルごとに口語化の時期が異なっていたことを指摘する。ここから、近代の文章の口語化にはテキストジャンルの性質が影響を及ぼすと考える。「6 研究の目的」では、これまで見てきた演説についての先行研究から問題点を抽出し、以下の2つの研究目的を挙げた。

- ・明治期演説資料における文体がどのように変遷していったのかを主に文末断定表現の変遷から研究する。
- ・言文一致文体成立に演説資料がどのような役割を果たしたのかを、テキストジャンルと文体の変遷の関係から研究する。

「II 研究対象と研究方法」では、Iの「6 研究の目的」で挙げた研究目的を果たすために、研究対象と研究方法について論じた。「1 研究対象」では、本研究で見る3つの研究対象である『明六雑誌』・『近代演説討論集』・「国立国会図書館デジタルコレクション」を挙げた。「2 本研究における演説資料の定義」では、本研究での「演説資料」の定義を示した。「3 演説資料の収集・選定方法」では、演説資料をどこから収集したのかを述べた。「4 本研究における演説資料について」では、本研究では「演説資料」を書き言葉の資料と見做すことを述べ、それ以下の「4 (1) 『近代演説討論集』について」・「4 (2) 『明六雑誌』について」・「4 (3) 国立国会図書館デジタルコレクション」で、それぞれの収集元から、「文語」・「混在」・「口語」のものがいくつ収集できたかを述べた。「5 研究方法」では、研究の方法を示し、「6 文体の認定(口語・混在・文語)」では、演説記事ごとの分類について述べた。「7 文末の認定方法」・「8 文末断定表現の分類」では、実際の例文も挙げながら、本研究における文末の認定方法と文末断定表現の分類について確認していった。「9 分析する資料について」では、第3章以降で見ていく実際に分析を施した調査の規模について演説の個数

や実際に見た総文数、文末断定表現の総数を挙げた。

「Ⅲ明治期演説資料における文体と文末断定表現」では、「1 演説記事ごとの文体」において、調査した演説資料の「文語」・「混在」・「口語」といった文体を見て、その推移を確認した。それを受けて「2 口語体における敬体と常体」では、ヤロシュ (2021)・近藤 (2021) の研究を引き、他のテキストジャンルにおいても演説資料で見られたような口語化の過程が見られることを示した。「3 口語体における文末断定表現」では、まず「3 (1) 全体的傾向」で、調査全体の文末断定表現の変遷を見て、それ以降の「3 (2) 明治7、8年 (『明六雑誌』、第1期)」・「3 (3) 明治11、12年 (『演説集誌』、第1期)」・「3 (4) 明治20、23、27年 (第2期)」・「3 (5) 明治30、33、36年 (第3期)」・「3 (6) 明治39、42、45年 (第4期)」では、各期ごとの文末断定表現の出現を具体的に見た。「4 敬体率と文末断定表現」では、「4 (1) 全体的傾向」で、敬体率の視点から見た全体の傾向を確認し、野田 (1998) の敬体と常体の使いわけの理論を紹介した。それ以降の「4 (2) 第2期」・「4 (3) 第3期」・「4 (4) 第4期」では、時期ごとの敬体と常体の使用意図を野田 (1998) の理論を参照しながら考察した。Ⅲのまとめに当たる「5 口語体における文体と文末断定表現」では、演説資料自体の文末断定表現の趨勢も見て、「でございます」系の文末断定表現が衰退していくことを指摘した。また演説資料における文体は基本的には常体化していきながらも完全に常体化一辺倒になるわけではなく、敬体的な要素を残し続けることを述べ、文末断定表現としては、「である」と「であります」が基本的な文末断定表現として定着していくことを示した。

「Ⅳ近代言文一致体形成における演説の役割」では、テキストジャンルごとに要請される文章が異なるのではないかと考えから、演説以外の「小説」と「論説」の文章を調査、分析し3つのテキストジャンルの文章を比較し、考察した。比較対象として、小説には嵯峨の屋おむろ「野末の菊」を用い、論説としては西田幾多郎『善の研究』を用いた。まず、「1 嵯峨の屋おむろ「野末の菊」との対比から」では、「野末の菊」の基本的な文章の性質を見て、そこで使用される文末断定表現「であります」が、小説の文章にうまく定着していないことを演説資料に見られる「であります」と比較して見た。また「2 西田幾多郎『善の研究』との対比から」では、言文一致文体の1つの完成とも見れる西田の『善の研究』の均質な「である」体を確認し、演説資料における「だ」系との比較から、論説という文章において「である」がふさわしい文末断定表現であったことを示した。「3 まとめ」では、近代言文一致体形成における演説資料の立ち位置について、小説と論説との比較から示した。

「Ⅴおわりに」では、これまで述べてきたことを簡単に概観し、「1 結論」では、Ⅰの「6 研究の目的」で提示した2つの研究目的に呼応させる形で、結論を示した。